

僕の頭の中はまた真っ白になった

「あれに、間に合えば、彼女が乗っていて、会えるものを。」
そう思いながら、がっくりしながら、僕はゆっくりと、電車を降りた。

僕は彼女のことを思いながら、
次の急行に乗り換える為に、とぼとぼと
京都側のフォームへ向かって歩いた。

もうすぐ、急行が来るので、
人がどかどか降りて、僕を追い越して行った。

「皆、せわしなく、元気だなあ。」
と思いつつ、僕は、皆の進む前方のフォームを見た。

見て、その時、僕は、はっとした。
そのフォームに彼女が立っていたのだ！

「彼女は、今の各停を、わざわざ、中書島で降りたんだ。」
僕は、一瞬、びっくりした。

「なぜだ！」
僕の頭の中はまた真っ白になった。

僕は、急にこわくなった。

「断りの返事を持っているのではないか！」
なぜか、その瞬間、僕は最悪の事を想像した。

彼女と一瞬、視線があったが、
僕はそれを逃げる様に、人の流れに身をまかせて、
彼女を避けて、その場を通り過ぎてしまった！